

さいの国さいたま芸術劇場開館 30 周年記念
バッハ・コレギウム・ジャパン
祝祭のオール・バッハ・プログラム

実施日 2024 年 9 月 28 日 土曜日
時間 16 時から 18 時まで 途中 20 分の休憩あり
会場 さいの国さいたま芸術劇場 音楽ホール

これは、読み上げ対応用の文字プログラムです。

主催：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団
後援：埼玉県合唱連盟
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 劇場・音楽堂等機能強化推進事業（劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業） 独立行政法人日本芸術文化振興会

プログラム

J. S. バッハ (1685年生まれ～1750年没)

1 「管弦楽組曲第3番 二長調」 バッハ作品番号1068

第1曲「序曲」

第2曲「エール」

第3曲「ガヴォット1,2」

第4曲「ブーレ」

第5曲「ジーク」

2 「モテット《歌え、しゅに向かい新しい歌を》」 バッハ作品番号 225

ソプラノ: まついあき、アルト: アレクサンダー・チャンス、テノール: さくらだまこと、バス: かくとおる

休憩 20分はいります

3 「2つのヴァイオリンのための協奏曲 二たんちょう」 バッハ作品番号1043

ヴァイオリン1: やまぐちゆきえ、ヴァイオリン2: たかだあずみ

第1楽章 ヴィヴァーチェ

第2楽章 ラルゴ・マ・ノン・タント

第3楽章 アレグロ

4 《ミサ曲 口たんちょう》 バッハ作品番号232より

第6曲 われらしゅをほめ

ソプラノ: マリアンネ・ベアーテ・キーラント

第26曲 アニュス・デイ

アルト: アレクサンダー・チャンス

5「カンタータ第191番《いと高きところには神に栄光あれ》」 バッハ作品番号191

ソプラノ: まついあき、テノール: さくらだまこと

第1曲 いと高きところには神に栄光あれ

第2曲 ちちと子、聖霊に栄光あれ

第3曲 始めにありしごとく

(プログラム終わり)

出演者

指揮: すずきまさあき

ソプラノ: まついあき

ソプラノ: マリアンネ・ベアーテ・キーラント

アルト: アレクサンダー・チャンス

テノール: さくらだまこと

バス: かくとおる

合唱と管弦楽: バッハ・コレギウム・ジャパン

ソプラノ1

まついあき

しみずこずえ

もちづきまりあ

ソプラノ2

マリアンネ・ベアーテ・キーラント

ふじさきみなえ
やまぐちきよこ

アルト 1,2
アレクサンダー・チャンス
あおきひろや
くぼのりゆき
ふせなおこ

テノール 1,2
さくらだまこと
かがみたかゆき
たにぐちようすけ
ぬまたしんや

バス 1,2
かくとおる
うらのちゆき
こいけゆうすけ
わたなべゆうすけ

トランペット 1~3
さいとうひでのり
おおにしとしゆき
むらかみしんご

ティンパニ

くぼしょういち

フラウト・トラヴェルソ 1,2

すがきよみ

まえだりりこ

オーボエ 1～3

さんのみやまさみつ

あらいごう

こばなやすか

ファゴット

こうふゆき

ヴァイオリン1

やまぐちゆきえ コンサートマスター

てらうちしおり

ひろみしほ

やまうちあやか

ヴァイオリン2

たかだあずみ

あらきゆうこ

ほりうちゆき

ヴィオラ

なりたひろし

あさぶきそのこ

〔コンティヌオ(つうそう低音)〕

チェロ

やまもととおる

しまねともふみ

ヴィオローネ

こんのたかし

チェンバロ

おおつかなおや

オルガン

すずきまさと

(出演者一覧終わり)

曲目解説:てらにしもとゆき

管弦楽組曲第3番 二長調 バッハ作品番号 1068

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685生まれ~1750没)は後半生にはライプツィヒの聖トーマス教会カントルとして教会音楽の分野で多数の作品をうみ出した。その一方でこの時期の彼は世俗音楽にも優れた傑作を書いており、特に学生たちを主体とした合奏団コレギウム・ムジクムの指揮者として活動したことは、組曲やチェンバロ協奏曲などの合奏音楽のジャンルで彼を新しい実験に駆り立てることにもなった。

管弦楽組曲第3番も1730年頃(異説あり)にこのコレギウム・ムジクムの演奏会のために書かれたと推定されている。トランペットやティンパニが入っていることにうかがえるように

しゅくてんてきな華麗さを持つ作品である。

フランス風序曲の様式(付点リズムを特徴とする部分と、きゅうそくなフーガふう部分が対照されるスタイル)による華やかな序曲に始まり、弦とつうそう低音のみによる叙情美溢れる有名なエール(アリア)、快活な2つのガヴォット、生き生きしたブーレと続き、最後は解放感のみなぎるジークによって閉めくられる。

モテット《歌え、しゅに向かい新しい歌を》バッハ作品番号 225

バッハは特定の機会のためにドイツ語のモテットを折に触れて手掛けていた。それらの多くは追悼式や葬儀のためのものだが、具体的な成立事情は不明な作品がほとんどで、ライプツィヒ時代初期の1726～27年の所産と考えられている本日のこのモテットも例外ではなく、新年の祝賀用、何らかの記念日用、追悼用など様々な説が出されている。二重合唱(8せい)の効果を生かしたフレッシュな作品で、はるかその1789年にライプツィヒを訪れたモーツァルトがこの作品を聴いて感動したというエピソードが残されている。

全体は3部分からなる。第1部は8せいの二重合唱が詩篇149:1-3をポリフォニックに歌い上げる。本日最後に演奏されるカンタータ バッハ作品番号 191の終曲に通じるがくそうも登場する。一転して第2部では、せいの儚さを歌う第二合唱のコラール(ヨハン・グラマンさく)と第一合唱のポリフォニックな祈りが交替する。第3部は詩篇150:2,6による鮮やかなフーガで、最後は4せいに統合されて閉じられる。

2つのヴァイオリンのための協奏曲 二たんちょう バッハ作品番号 1043

この協奏曲はかつてはバッハがケーテンの宮廷楽長を務めていた1720年前後に宮廷楽団の優れたヴァイオリン奏者シュピースのためにかかれたといわれてきたが、近年の研究では、もっと後のライプツィヒ時代に(おそらく最初に聴いた管弦楽組曲第3番と同じ頃に)コレギウム・ムジクムの演奏会のためにかかれたとする説が有力になっている。バッハの多くの協奏曲と同じくイタリア・バロックの協奏曲様式(急－かん－急の3楽章構成、急の楽章でのリトルネッロ形式の採用を特徴とする)をとりつつも、そこに彼らしい対位法的しよほうを生かした作品で、2つの独奏パートが対等な関係で模倣し合いつつ、オーケストラとの間でも対位法の綾を織りなしている。

緻密な作りのうちに力強い展開を繰り広げるヴィヴァーチェ、2つの独奏が美しく絡むラルゴ・マ・ノン・タント、技巧性を生かした活気あるアレグロという3つの楽章からなっている。

《ミサ曲 口たんちょう》 バッハ作品番号 232 より〈われら主をほめ〉〈アニウス・デイ〉

バッハの畢生の大作《ミサ曲 口たんちょう》は最晩年の1748～49年に完成された。もっとも成立の歴史は1733年のキリエとグローリアにさかのぼる。当時ライプツィヒ市当局と間に軋轢を生じていたバッハは、カトリックのドレスデンの宮廷作曲家の地位を得ることで自らの立場を優位にしようと考えていた。そこで新しくその選帝候となったフリードリヒ・アウグスト2世に捧げるためにラテン語によるキリエとグローリアを作曲したのである。

晩年になってバッハはこれにクレド以下を付加することで通作ミサにすることを企て、先のキリエとグローリアを第1部『ミサ』とし、第2部『ニケア信経』(クレド)、第3部『サンクトゥス』、

第4部『オザンナ、ベネディクトゥス、アニュス・デイとドナ・ノビス・パチエム』を作り上げ(旧作の転用も多い)、ミサ曲を完成させた。本日はその中から2曲が演奏される。

グローリアの中の〈われら主をほめ〉は技巧的な独奏ヴァイオリンを伴ったソプラノのアリアで、装飾的な旋律で神を賛美する。

〈アニュス・デイ〉はユニゾンのヴァイオリンを伴ってアルトが憐れみの祈りを捧げるアリアである。

カンタータ第191番《いと高きところには神に栄光あれ》バッハ作品番号 191

ルター派の教会音楽家バッハが残したおびただしい数のカンタータはドイツ語のテキストによっているが、この《いと高きところには神に栄光あれ》はラテン語によった例外的な作品で、先に触れた《ミサ曲 口たんちょう》のグローリア中の3つの曲の転用によって作られたクリスマス用のカンタータである。どのような機会のためにこうしたラテン語のカンタータが編まれたのかは不明だが、1743～46年のいずれかの時期にライプツィヒで初演されたと考えられており、また最近では1745年のクリスマスに行われた対プロイセン講和記念礼拝の機会に取り上げられたという説も出されている。

第1曲は《ミサ曲 口たんちょう》のグローリア冒頭曲のテキストと音楽をほぼそのまま転用したもの。トランペットとティンパニとの華麗な効果を生かしつつ、合唱が壮麗に神を賛美するしゅくてんてきな音楽に始まる。この開始部分はさんみいったいを象徴する3拍子をとるが、やがて地を象徴する4拍子の音楽に転じ、低い音域で合唱が地の平和を祈る。そしてフーガとなって次第にこうちょうしていく。

第2曲は弱音器付きの弦楽器を背景にフルートがギャラント

風の優美な旋律を軽やかに奏で、ソプラノとテノールがにじゅうしょうを歌い出す。原曲の《ミサ曲 口たんちょう》では“父”と“子”の同一性が歌われるが、このカンタータではテキストが変更され、“父”と“子”と“精霊”のさんみいったいを歌い上げる曲となっている。

第3曲は《ミサ曲 口たんちょう》のグロリアの終曲の転用による合唱曲だが、テキストの変更に応じて音楽も改変が施されている。活気に満ちた曲で、鮮やかなフーガ部分を取り入れつつ、高揚感に満ちた盛り上がりを生み出していく。

(曲目解説終わり)

歌詞対訳

モテット《歌え、しゅに向かい新しい歌を》 バッハ作品番号 225

やく:ふじわらかずひろ

[合唱](1 2)

—創造主なる神を讃え、賛美せよ—

歌え、しゅに向かい新しい歌を、

信徒らのあつき集いは、しゅをたたえよ。

イスラエルは 主を喜べ、彼らをつくられた主を。

シオンの子たちはたのしめ、彼らの王を、

彼らは踊りつつそのみなをたたえ、

太鼓と豎琴をば しゅにかなでよ。(詩編149:1-3)

[コラール／アリア](2 1)

—神はわれらの弱さを知り、我らを支えられる—

父が憐れみをもて

神よ、我らをなおも御心に留め給え、
その幼子らをはからうがごとく、
主は我らすべてをあわれまれる、(詩編103:13)
我らが幼子のごとく 主をひたむきに畏れ敬うかぎり。
主はつくられしものの弱さを覚え、
神は我らが塵にすぎぬと知れたもう、(詩編103:14)

あなたがいまさずば、何一つ

我らのなすべきこと 遂げられることなければなり。
さながら熊手に刈り取られた草、
ひとひらの花、落ちゆく木の葉にすぎぬと。(詩編103:15)
風がその上を吹き渡るだけで、
そこには最早何一つ残ることなし、(詩編103:16)
されば あなたこそ我らの避け所、また光なれ、
もし我らの望み、我らをあざむかざれば、
あなたはこののちも避け所、光ならん。

かくて人もまた過ぎ行き、
そのいまわの時は、間近に迫りぬ。
幸いなるかな、ただひたすらにしかと
あなたとその慈しみとに頼る者は。

[Johann Gramann作のコラール“Nun lob, mein
Seel, den Herren”『わが魂よ、いざ主をたたえよ』
(1530)の第3節;作者不詳のアリア]

[合唱](1 2)

—創造主なる神を讃え、賛美せよ—
主をたたえよ、そのみわざのゆえに、
主をたたえよ、そのおおいなる栄光のゆえに！(詩編150:2)
すべての息あるものよ、主をたたえよ、ハレルヤ！(詩編

150:6)

《ミサ曲 口たんちょう》バッハ作品番号 232

やく:すずきまさあき

6. 独唱（ソプラノ2）＋ヴァイオリン独奏

われら主をほめ、

主をたたえ、

主を敬い、

主をあがめ、

26. 独唱（アルト）

神のこひつじ、

世の罪を除きたもうしゅよ、

われらをあわれみたまえ。

カンタータ第191番《いと高きところには神に栄光あれ》バッ

ハ作品番号 191

やく:ふじわらかずひろ

[第一部]

1. [合唱](ルカ2:14)

—大頌栄より—

いと高きところには神に栄光あれ。

地には平和が御心に適う人びとにあれ。

説教後に

[第二部]

2. [にじゅうしょう](ソプラノ、テノール)

—小頌栄 第一部—

父と子、聖霊に栄光あれ。

(参照 マタイ28:19／フィリピ4:20／ヨハネ11:4)

3. [合唱]

—小頌栄 第二部—

始めにありしごとく、今も、常に変わりなく
代々限りなく、アーメン。

(参照 黙示録 4:8／詩編 106:48／ユダ 25／フィリピ
4:20)

(対訳おわり)

出演者プロフィール

すずきまさあき 指揮

1990年“バッハ・コレギウム・ジャパン(BCJ)”を創設以来、
バッハ演奏のだいいちにんしゃとして名声をはくす。グループ
を率いて欧米の主要なホール、おんがくさいに度々登場して
おり、雄弁かつ透明なサウンド、本質に迫る演奏アプローチ
で、極めて高い評価を積み重ねている。録音も多く、ソロでは
『J. S. バッハ:チェンバロ全曲録音シリーズ』、『J. S. バッハ:
オルガン傑作集』、『ブクステフーデ:オルガン名曲集』、『スウェー
リンク:ジュネーヴ詩編歌』、『J. S. バッハ:オルガン作品集
Vol. 1、2、3、4』などがある。近年はモダン・オーケストラと
も活発に共演し、多彩なレパートリーを披露。2022年12月
NYフィルなどに客演。01年ドイツ連邦共和国功労勲章功労
十字小綬章、12年バッハの演奏に貢献した世界的音楽家に贈
られる「バッハ・メダル」、ロンドン王立音楽院・バッハ賞などを

受賞。13年度第45回サントリー音楽賞をBCJと共に受賞。15年ドイツ・マインツ大学よりグーテンベルク教育賞、21年 Royal College of OrganistsよりRCOメダルを受賞。イエール大学アーティスト・イン・レジデンス、神戸松蔭女子学院大学客員教授、東京藝術大学名誉教授、オランダ改革派神学大学名誉博士。

バッハ・コレギウム・ジャパン 合唱&管弦楽

1990年鈴木雅明により創設。音楽監督に鈴木雅明、首席指揮者にすずきまさとを擁する。世界各国から集まる古楽のスペシャリストとともに、オリジナル楽器を用いてバッハを中心とした音楽遺産の理想的上演を目指し演奏活動を行う。多数のCD録音が高い評価を受けるほか、BBCプロムスやカーネギーホールなど世界中で活発な演奏活動を展開。2022年秋の9都市を巡る欧州公演、23年6月ライブツィヒ・バッハ音楽祭フィナーレへの招聘、24年8月BBCプロムスで数千人の聴衆から熱狂的な喝采を浴びる等、日本のみならず世界の音楽シーンを牽引している。第45回サントリー音楽賞を鈴木雅明と共に受賞。18年の年月をかけて完成した『バッハ：教会カンタータ全曲シリーズ』は、世界的にも貴重な成果として注目を浴び、「ヨーロッパのグラミー賞」と称されるエコー・クラシック賞を受賞。20年秋上演のすずきまさと指揮・ヘンデル《リナルド》公演が第19回さがわよしお音楽賞を受賞。

まついあき ソプラノ

東京藝術大学声楽科卒業、同大学院修士課程及び博士課程修了、博士号取得。日本ドイツ歌曲コンクール優勝、文部科学大臣奨励賞、日本R. シュトラウス協会賞受賞。日仏声楽コンクール優勝。日本音楽コンクール(歌曲部門)入選。アカンサス音楽賞、どうせいかい賞、三菱地所賞受賞。在学中よりBCJのメンバーとして国内外の公演やレコーディングに数多く参加、近年はソリストとして高い評価を得ている。特に2022年秋欧州ツアー、23年6月ドイツツアー《ミサ曲 口たんちょう》では絶賛された。

マリアンネ・ベアーテ・キーラント メゾソプラノ

ヨーロッパ最高の歌手の一人。ノルウェー人歌手としては唯一グラミー賞にノミネートされた。ハノーヴァー国立歌劇場のアンサンブル・メンバーを振り出しに、主要なオーケストラとたびたび共演、17 世紀の作品から現代音楽まで幅広いレパートリーを持ち、多方面で活躍している。東京の新国立劇場でのアレッサンドリーニ指揮ヘンデル《ジュリオ・チェーザレ》題名役のほか、パーセル《ディドとエネアス》、モンテヴェルディ《オルフェオ》、ワーグナー《ラインの黄金》などに出演。その他オスロ・フィル、ウィーン響、マーラー室内管、18世紀オーケストラや、指揮者は、ビオンディ、ブロムシュテット、コルボ、ヘレヴェッヘらと共演。CD録音は50タイトル以上に及ぶ。BCJとも多く共演し、2023年ヘンデル《復活》、《ジュリオ・チェーザレ》等

アレクサンダー・チャンス カウンターテナー

1992年ロンドン生まれ。オックスフォード大学ニューカレッジに学ぶ。在学中よりサンフランシスコ・グレース大聖堂での《マタイ受難曲》公演に出演するなど、ソリストとして国内外で活躍の場を広げる。オックスフォード・ニュー・カレッジ合唱団のメンバーとして録音にも多数参加、タリス・スコラーズ、ヴォクス・ルミニスなどのグループで、ルネサンス作品にも熱心に取り組んでいる。これまでに、フライブルク・バロック・オーケストラとの《マタイ受難曲》ツアー及びバッハのカンタータの録音、エストニア・ヴォーチェス・ムジカーレとのヘンデル《メサイア》などに出演。BCJとは2022年秋ヨーロッパ公演、23年日本での《ジュリオ・チェーザレ》、24年《マタイ受難曲》などでも澄んだ歌声で聴衆を魅了した。

さくらだまこと テノール

東京藝術大学大学院修了後、渡伊。声楽を故ひらのただひこ、G.ファッブリーニ、W.マッテウツィ、G. バンディテッリの各氏に師事。バロックから古典派の作品をレパートリーに国際的にも高い評価を得ており、国内外の古楽アンサンブルやモダン・オーケストラと共演。クレモナ音楽祭《ウリッセの帰還》、エディンバラ音楽祭《オルフェオ》等主要オペラでも活躍。2021年《マタイ受難曲》公演でのエヴァンゲリストは国内外でオンライン配信も行われ、高評を得た。NHK『クラシック倶楽部』『ベストオブクラシック』出演。02年ブルージュ国際古楽コンクール第2位(声楽最高位)。東京藝術大学教授。二期会会員。

かくとおる バリトン

東京藝術大学大学院修士課程を首席で修了。修了時に大学院アカンサス賞受賞。二期会オペラ研修所マスタークラスを総代で修了。バロックから現代音楽、ミュージカルまで幅広いレパートリーを持ち、宗教音楽においては、BCJとの共演で多くの名演を共にしている。オペラではモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》タイトルロール、《コジ・ファン・トゥッテ》、J. シュトラウスにせい《こうもり》、ヘンツェ《午後の曳航》などに出演。ベルク《ルル》では急遽代役としてなんやくシェーン博士を演じ、表現豊かなえんしょうで観客を魅了。メディアでもテレビ朝日『題名のない音楽会』、NHK-FM『リサイタル・ノヴァ』などに出演し活動の場を広げている。洗足学園音楽大学非常勤講師。

やまぐちゆきえ ヴァイオリン

桐朋学園にて故えとうとしや氏に師事したのち、文化庁派遣芸術家研修員としてアムステルダム音楽院に留学。ルーシー・ファン・ダール氏にバロック・ヴァイオリンを師事し、栄誉賞付き最高得点を得て修了。ボンポルティ国際古楽コンクール、ブルージュ国際古楽コンクール共にアンサンブル部門で第1位。ドイツ在住。BCJのコンサート・マスター、ソリストを務める他、ヨーロッパではB'Rockオーケストラ、コンチェルト・ケルンの首席奏者としてルネ・ヤーコプス氏、ケント・ナガノ氏等の指揮のもとで演奏を重ねる。昨年はテノール歌手のイアン・ボストリッジ氏とシューマンの歌曲で共演。19世紀ドイツロマン派のヴァイオリン奏法の研究も教本の翻訳を通して進めている。

たかだあずみ ヴァイオリン

3歳よりスズキメソッドでヴァイオリンを始める。桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学音楽学部卒業、同研究科生課程修了。すみさぶろう、うんのよしお、みよしあきら、いわさきしゅくの各氏に師事。1983年第2回日本国際音楽コンクール第4位入賞。85年第41回ジュネーヴ国際音楽コンクール最高位(1位なしの2位)に入賞。バッハ・コレギウム・ジャパン、オーケストラ・リベラ・クラシカなどのコンサート・ミストレスとして活躍。95年度村松音楽賞受賞。2011年より妹はるみとDuo Sorelleを結成し、定期的な活動を行う。21年にはファーストアルバムをリリースし、「レコード芸術」特選盤、「音楽現代」推薦盤など、高評価を得る。

(出演者プロフィール終わり)